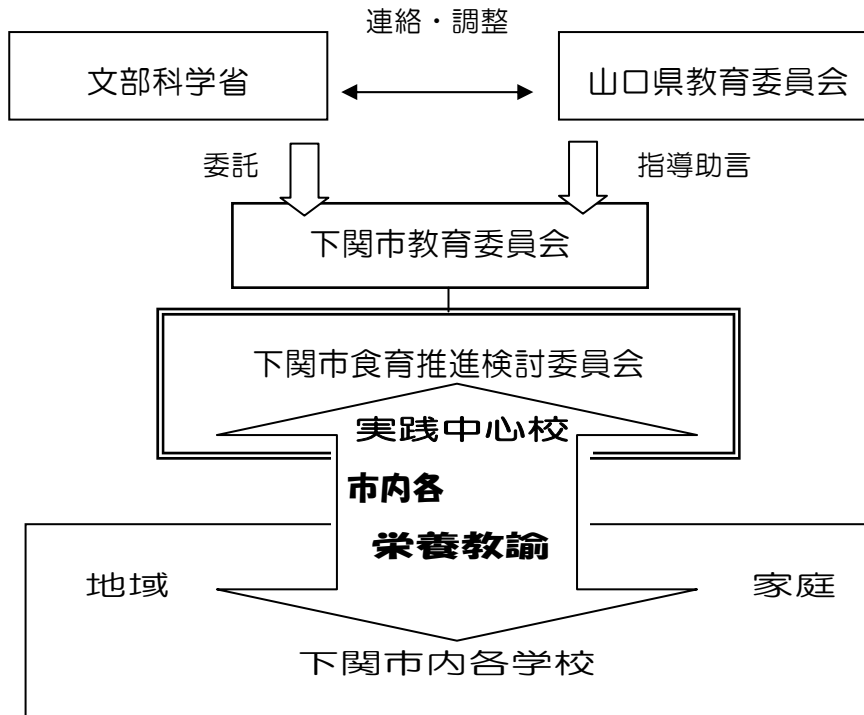


栄養教諭を中核とした食育推進事業 結果報告書

都道府県名	山口県
推進地域名	下関市

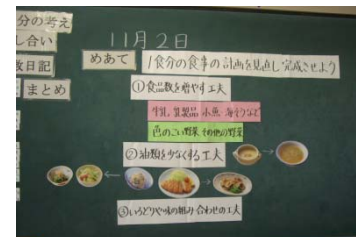
1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 【知育】各教科等における食に関する指導の充実のための取組

- 食に関する全体計画、年間指導計画の作成
- 食に関する授業等の実践
 - 3年・4年の保健、5年・6年の家庭科で授業実践を行った。
 - 給食時、ランチルームで発達段階に応じて栄養指導を行った。
- 各教科における食に関する授業の実践
 - 担任が行う食に関する指導資料の提供とコーディネーターとして関わった。
- 教職員への資料提供
 - 食に関する指導資料の提供を行った。栄養教諭・栄養士の研修会で作成した資料を各小・中学校へ配布し、食に関する指導を推進した。
- 「食育」と「学力」の関係の調査研究
 - 学力を支えるものとして、基本的な生活習慣の実態を調査研究し、学力向上に役立てた。
- 専門家と連携した食育指導の実施
 - 山口大学教育学部山田次郎教授を講師として招へいし、専門的立場から4年生と6年生を対象に食育教室を実施した。



食育教室

テーマ2

【徳育】地域食材のよさを知り、感謝の心や郷土愛を醸成する取組

- 食育関連の本の読書活動を通して「いのち」や「自然めぐみ」への感謝の心を育てる取組

ランチルームや図書室に「食育コーナー」を設けた。給食委員を指導し、委員会活動の一つとして各学年で、食育の紙芝居の読み聞かせを行った。また、図書委員といっしょに、食育の本の読み聞かせを行った。1年生には、保護者の読み聞かせの会による食育活動を行った。



山口県や下関市にゆかりのある「金子みすゞ」の詩等を通して、地域に根ざした特色ある食育活動を行った。

- 生産地を見学し、生産者や流通者への感謝の心を育てる取組

栄養教諭が生産者から情報を収集し、子どもたちに伝えた。

- 地場産食材を使用した学校給食の実施

下関市水産課等と連携し、食材の提供を受けた。

- 食育ボランティアの活用による体験学習のコーディネート

生産者や講師との連絡調整、校内の調整を行い、2年生の生活科で、栽培活動を生産者とともに体験した。5年生の社会科では、農業水産関係者の体験による講話を行った。出前講座水産課を活用して、専門的な立場から、3、4年生に講話を行った。



テーマ3

【体育】子どもの健康を保持増進させるための望ましい食習慣を形成する取組

- 食育講演会の実施

8月2日、金子みすゞ記念館 矢崎節夫館長を講師に「みすゞさんのまなざしをとおして」と題して、保護者、山口県内・下関市内教職員を対象に「いのちと心を育む」食育について、講演を行った。

- 試食会の実施

地域の方や1年生の保護者等を対象に行った。

- 親子料理教室の開催

夏休みに中邑房枝先生を講師に「まるごとやまぐち地場産物を使った郷土料理」を栄養教諭や教職員の協力で実施した。(親子17組 38人)



- 朝食の欠食改善と給食の残食量ゼロに係る取組

食生活アンケートを実施・分析し、食育だよりで結果を報告した。また、給食がんばりカードを作成・活用することで、学校と家庭が連携して取り組んだ。

- P T A活動による保護者への啓発

保護者の食育研修として、P T A教養講座で、山口大学教育学部 山田次郎教授を講師として招へいし、「食事は愛のハーモニー ～ 食事で心を育てることの大切さ」と題した講演会を実施した。

- 学校保健安全委員会の活用、学校医の指導をもとにした健康教育の充実及び家庭や地域への啓発
健康生活カード、食生活アンケートを通して、家庭の食生活の意識を高めた。

テーマ 1～3 に共通する具体的計画

- 家庭における食生活アンケートや給食がんばりカードの結果を、給食指導や食に関する指導に活用している。
- 食育だよりや給食試食会の資料で、食への関心を深めている。

数字で変化のあった事項について

- 朝食欠食率の変化 平成 22 年 4 月 7% → 9 月 1% → 平成 23 年 1 月 1%
- 給食の残食量の変化 平成 22 年 4 月 2.0% → 9 月 1.5% → 平成 23 年 2 月 0.2%
- 地場産物の使用率 平成 21 年度 39.5% 平成 22 年度 1 学期 39.5% 3 学期 1 月 49.4%

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 栽培活動では、農業に携わっている方を招へいし、児童とともに活動しながら栽培についての指導をしていただいた。活動の中で児童は様々なことに気づき、農業に対して興味をもつことができた。
- 農業や漁業に実際に携わっている方や水産課の職員から直接児童に話していただく場をもつことができ、児童が農業や漁業に興味をもつきっかけをつくることができた。
- 食育教室を開催し、専門家の話を聞くことで、自分の食生活を見直し、改善していこうとする意欲付けになった。
- 低学年の児童に対して、食育関連の本や紙芝居を読み聞かせすることで、食に関して、さらに興味・関心をもたせることができた。
- 食育担当を各校の校務分掌に位置付けたことで、各担当栄養教諭・学校栄養職員との連携がスムーズになり、食に関する全体計画の作成や情報交換等に役立った。
- 栄養教諭による食に関する指導以外にも、学級担任による各教科等における食に関する指導の時間が増え、教職員の食育に対する意識の向上が見られるようになった。
- 栄養教諭による地域の生産者等の新たな人材発掘、食育関係機関との連携により、各校における食育ボランティアや関係機関の活用が増えた。
- 栄養教諭配置校訪問の各教科等における食に関する授業公開により、様々な学校や立場の教職員で研究協議する機会が増え、全市的な食育推進にもつながり、また、栄養教諭にとっても、授業力向上のよい機会となった。

- 豊北地域では、栄養教諭が中核となり地区の食育推進委員会を組織するなど、自主的な食育の体制づくりが進んだ。
- 栄養教諭・学校栄養職員によって構成されている下関市教育研究会「食に関する教育部会」の研究により、地場産物や伝統料理・郷土料理の紹介等、食育に関する指導資料等の市内全校での共有化がより一層進んだ。また、栄養教諭のみならず、市内学校栄養職員の各学校における食育への参画も一段と高まってきた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- 学校給食を通して、家庭の食生活の意識を高める等、学校と家庭の連携により、より一層望ましい食習慣を身につける取組が必要である。
- 食育関連の図書や紙芝居などの活用は大変有効であった。さらに資料を増やし、図書の時間だけでなく、教科の時間にも活用を深めていきたい。
- 栄養教諭や学校栄養職員が配置されている学校と、配置されていない学校とでは、食育推進の状況が異なる。それぞれの地域の特色や文化を生かしながら食育を進めていくためには、栄養教諭を中核とした地区ごとの食育推進検討委員会等の組織づくりを進める必要がある。
- 栄養教諭・学校栄養職員と、学級担任等教職員との温度差がまだまだある。各校における食育担当者への研修を充実させ、全教職員のさらなる食育への意識向上、参画を進める必要がある。また、栄養教諭、学校栄養職員による巡回指導の方法の改善、内容の充実も今後必要である。
- 食育関連機関、食育ボランティア等の活用について、各校への周知が徹底できていない。年度初めに活動可能な食育ボランティア等について全幼稚園、小・中学校へ周知し、全体計画にその活用を組み込んでもらうことが必要である。また、今後さらなる栄養教諭による食育ボランティアの人材発掘、登録、各学校への仲介を進めていくとともに、その支援が必要である。